

平成25年(ワ)第38号、平成25年(ワ)第94号、平成25年(ワ)第175号

「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件等

原告 中島 孝 外

被告 国、東京電力株式会社

意見陳述書

2014年3月25日

福島地方裁判所民事部 御中

氏名

(原告番号 T-0214)

1 経歴等

東京電力の原発事故から3年が過ぎました。しかし、私たちの被害者をめぐる状況は、何一つ良くなってはおりません。

私は、1942（昭和17）年に、宮城県登米郡石越町に生まれました。福島大学に入り、卒業後は、同じく教員の夫と共働きをしながら、中学校の教員を続けました。退職後は、長男が福島市内の病院に医師として働いていることから、福島市内で長男家族と同居し、義母や孫の世話など家事にたずさわっておりました。

2 原発事故直後

原発事故のことはテレビで知りました。今考えて一番悔しいことは、3月11日の夜には全電源喪失ということで、12日には原発の地元の人たちが大型バスで移動させられている緊急事態の頃、水汲みなど列を作って長時間外に私たちがいたということです。給水も一人5リットルしかもらえないということだったの

で、小学生も連れて並んだりしました。3月14日頃、爆発の映像が、事の深刻さを私たちに知らせたのです。

3 避難しなかった理由

私は、3月15日あたりに友人から「インターネットで、『原発で働いている人やお医者さんの家族が真っ先に逃げている。』って言っているよ。保子さん、どうして落ち着いていられるの。」と電話がかかり、少なからず動揺しました。しかし、介護施設に入所している夫の母を残して、自分たちだけの避難はあり得ません。息子に「こういうとき病院関係者はどうなるの。」と聞くと、「病院のシステム全体が移動する。最後の患者さんの移動が決まったら、自分たちも移動する。」とのことでした。息子や嫁の決意を聞かされ、私たちの避難は最後になる、とその時考えました。と同時に、孫たちだけでも避難させることはしないのか聞くと、「あの子供たちが、親と離れて暮らす精神的に不安定な生活には、耐えられないだろう。内部被ばくを避けるための食事の注意や、無用な外部被ばくを避ける注意をして暮らす。」との返事でしたので、長男夫婦の判断を尊重しようと思いました。

ただ、今でも、あのときの判断が正しかったのか、放射線量が高かった3月中旬から、一時的な避難を知り合いの人がやっていた事を見聞きすると、複雑な気持ちにするのも事実です。

実際、福島市に放射性物質が大量に降ったと思われる3月16日には、上の孫の高校入試合格発表があり、大人の心配をよそに孫は一日中外出しておりました。入学後配られた生徒会新聞によると、高校の敷地内に60マイクロシーベルトの箇所が物理の先生の計測で記録されていました。また、ある高校の側溝は、100マイクロシーベルトあるという噂があり、浜風が福島市に放射性物質を大量にもたらしたことも本当だと思います。知らなかったとはいえ、子供を水汲みの列に並ばせたことなど、今でも後悔しています。

4 日常生活の変化

食べ物は注意しています。実家の宮城県でも稲わらなど、ホットスポットが言

われますので、もらった米も線量を測りますし、土産の笹かまぼこは「浜通りも塩竈もつながっている。」と思うと、このかまぼこはどこの魚を使っているかを確かめずにはいられません。私は福島県人となって54年間、新鮮でおいしい野菜や米や魚で健康に生きてこられ、家族をつくってこられましたので、買った場合はもちろん、頂いた物へも感謝の気持ちを欠かしたことはなかったのに、原発事故は、地域の食材への不安や「確かめる」ということも必要という、苦しい心情に苦しめられます。退職後は、ゆっくりと暮らしたいと思っていたのに、いつも落ち着かず不安です。

5 人間関係の問題

子育てサークルの若いママは、米沢に、二人の女の子と、お腹に一人を抱えて避難しました。周りの人にもよくしてもらい、外遊びも思いっきりできて、健康的な子供の暮らしができていたので、福島にはもう少したってから帰りたいと思っていたのですが、家賃補助もなくなって、夫を通わせていつまでいる気か、と姑や夫の姉たちから責められ、泣く泣く戻りました。離婚も考えたそうですが、将来子供がガンなどになったら、夫のいない中で暮らせるか、福島に帰ってリスクがあってもパパのいる暮らしの方がいいのか考えた結果ということです。「福島で子育てするのは虐待だ。」などのインターネットの書き込みを見て悩むママたち。給食の食材に福島県産が出ると拒否したくなる不安な心情など、例をあげたらきりがなほどです。

息子の同僚もだいぶやめて県外に行き、今は、その穴が埋まりません。支援の医師が帰るのに合わせた「朝5：30交替」という勤務もでき、大変なようです。時々新人発掘の説明会に出張しますが、「他県には長い列ができるが、福島にはなかなか。」と疲れて帰ってきます。福島の病院はみな同じようなのではないのでしょうか。

6 国と東京電力に対して

強制的に避難を強いられていない私たちも、このように悩み、苦しんでいるの

です。このあと、孫たちの世代が、原発の廃炉のために長い年月と解決されない放射性物質がそのまま残された地域で暮らすことが、将来、どのように影響するかとても心配です。孫たちや次の世代が、きれいなふるさとで生まれ育ったという誇りを取り戻せるように、早く国と東京電力は自らの過失を認め、二度と同じことを起こさないように、解決に力を尽くしてください。このような私たちの声を司法の力で代弁してくださることを切に願って、私の陳述を終わります。

以上